



事務室前の廊下

二葉館1階、事務室前の廊下の壁には、古い箱型の機械装置が備え付けられています。「これは何かしら？」とお客様からのご質問も多いこの機械、実は、大正から昭和初期にかけて使われていた邸内用の呼び鈴です。現在は、展示物として廊下の壁に設けられていますが、創建当時は、女中室（現事務室）内に設置されていました。

二葉館あれこれ Vol.12

呼び鈴

この呼び鈴は、貞奴が指令を伝える時などに重宝していたようです。急な客人の来訪があつても、貞奴はすぐに玄関へ対応に出ることはせず、自身は茶の間に座ったまま、使用人に指示を出していました。呼び出しの合図も決められていたようです。プザー音を一回鳴らした時は、養女の富司氏を呼んでおり、二、三回の時は、使用人を含めて全員集合、鳴りっぱなしの時は、非常用などとしていたそうです。



呼び鈴

呼び鈴の表示盤を見ると、等間隔に並んだ金属製のプレートの上に「応接」「玄関」等と書かれているのが、うっすらと読み取れます。それぞれの部屋には、呼び鈴へつながる呼び出しスイッチが設置されています。スイッチが押されると、プザー音と共にプレートが倒れ、各部屋に割られる番号が現れる仕組みになっています。これにより、使用人たちは、どこから呼ばれたのかが一目でわかり、すぐに貞奴のもとへ向かうことができました。

呼び鈴と各部屋のスイッチは、電線につながっていました。呼び鈴の上部を見ると、電源の端子の横に、表示盤のプレートと同じ数の接続端子が付いていることがわかります。当時の先駆的な電化住宅だったこの館には、大きな大理石の分電盤が設置されていました。そこから壁内や屋根裏に、多数の電線が引かれて、各部屋へと伸びていたのです。当時の充実した電気設備を今に残すもののひとつが、この呼び鈴だと言えるでしょう。

IRODORI いろどり

二葉館には常設展示にまつわるエピソードがあります。今回は貞奴の起業した川上絹布についてご紹介します。



洋装の貞奴の写真

川上絹布株式会社は、貞奴によって一九二八年（大正七）に設立されました。場所は現在の名古屋市中区、地下鉄上飯田駅付近です。貞奴の養女・富司氏によれば、川上絹布では十五、六歳から二十歳ぐらいまでの四、五十人の女工が働いて、たそうです。紺色のセーラー服を着て靴を履き、女学生のような恰好をした女工たちが、45分作業をして15分休むというサイクルで仕事をしていました。昼休みの運動にテニスをするのでハイカラだと珍しがられたそうです。全寮制で、勤務時間は朝9時から夕方5時頃まで、夜はお茶、お花、和裁などを習わせ、休日には演芸会などのレクリエーションが催されていました。当時の女工といえは過酷な労働が常の時代でしたが、欧米を見聞してきた貞奴ならではの、福利厚生が充実した職場であったことがうかがえます。

工場閉鎖後は戦時中に青年学校に使われていましたが、空襲を受けて全焼しました。



奴めいせん

一九三三年（大正11）に東京・上野で平和博覧会が開催され、川上絹布も出品した写真が残されています。桃介の手掛ける大井ダムをかたどった装飾で、上部には洋装の貞奴の写真が掲げられ、中央にはダムの模型が設置されています。ダムの放水に見立てて白地や縮緬地、友禅など6筋の織物が流れており、土手に当たる両側には、名古屋、川上絹布の立て看板、遠景には樹木と名古屋城、その間を送電線が走っています。布地の裾には、「奴めいせん」「奴きぬ」など銘柄を記した幟を持つ町奴が描かれた札が置いてあります。

二葉館では、川上絹布製の生地で作った搔卷（かいまき）布団や座布団を常設展示していますので、どうぞご覧ください。（参考文献：山口玲子著「女優貞奴」）



平和博覧会の様子

文化のぐらりさんぽ ⑫

文化のみち堀美術館 リニューアルオープン！



堀美術館

二葉館からほど近い「文化のみち堀美術館」が、昨年11月に新館増設されてリニューアルオープンしました。堀美術館は、株式会社グアテックを創業した堀誠氏の絵画コレクションを一般公開するため、2006年に開館しました。現在は、公益財団法人堀科学芸術振興財団によって、社会貢献事業のひとつとして運営されています。館長でもある堀氏に、今回お話をうかがいました。



新館大展示室

最初に案内していただいた2階の展示室には、加山又造、棟方志功、杉山寧らの作品がずらりと並んでいます。いずれも教科書や美術書に掲載される、近代を代表する日本画家です。そして、1階の展示室へ移ると、艶やかな色彩と豪放な筆致で知られる洋画家・梅原龍三郎や、乳白色の肌々が特徴的な人気画家・藤田嗣治の作品たちが迎えてくれました。ふたりとも同時代にバリへ渡り、エコール・ド・パリの影響を受けましたが、作風が全く異なるのが印象的です。



増設された新館

西欧の美術文化を取り入れ

ながら、新しい独自の画風を生み出した、これら日本近代美術の傑作は、堀氏の優れた審美眼によって選ばれ、約50年前から収集されてきました。さて、順路に沿って新館へと進んでいきます。展示室に足を踏み入れると、鮮やかな色彩を放つ、いくつもの大キャンパスに思わず目を奪われました！作者は、愛知県一宮市出身で、女性洋画家として初の文化功労者に選ばれた、三岸節子です。1940年から1998年までの主要作品28点が、広大な二室を囲むように配され、圧巻の迫力です。これらの作品を集めるのに、30年ほどかかったようですが、さぞ大変な事だったと思いますが、「こういうことをしていると、自然と作品が集まってくる」のだそうです。

さらに奥の小展示室には、横尾忠則、有元利夫、荻須高德、香月泰男など有名な画家の作品も紹介されています。文化のみち散策途中に立ち寄って、じっくりと鑑賞してみたいかがでしょうか。

- 文化のみち堀美術館 【所在地】 東区主税町四丁目4番2 【開館日時】 金土日祝の午後1時～5時 【観覧料】 一般1000円 【電話】 052-797-9717

from Archive 書庫棟から 明治の短歌誌「八少女」



「八少女」(復刻版)

短歌の歴史は古く、七世紀から八世紀後半にかけて編纂された「万葉集」が、現存する日本最古の歌集といわれています。時代を経て明治期になると、与謝野鉄幹が「明星」を創刊し、後に妻となった与謝野晶子と共に、浪漫主義短歌の全盛時代を築きました。そしてこの頃より、伝統を保つ旧派に対抗して、個性を尊重する新派が、地方でも芽吹き始めたといわれています。

名古屋では、明治四十一年に短歌雑誌「八少女」が創刊されました。この同人誌は「明星」に触発されて発刊されたもので、当地発の短歌雑誌としては比較的初期のものに当たります。熱田区（熱田神宮南）を拠点とした八少女会から発行されました。誌名「八少女」の由来は、八人の若き同人一花岡桃崖、尾崎楓水（久弥）、松岡桂風、

牧撫羊、松岡黒狸、市川天白、花岡和歌子、鷺野飛燕により出版されたためと、のちに編集者の鷺野飛燕が伝えています。わずか三年ほどの発行期間に全二十冊編まれましたが、なかには若山牧水、北原白秋、佐々木信綱、窪田空穂、吉井勇、折口信夫など、中央で活躍する歌人の名前も見受けられます。若山牧水においては、第二号から参加し、「第二歌集」独り歌へる」を、八少女会から刊行しています。

このように、中央歌人らと交流をもった地方誌「八少女」は、次に雑誌などで紹介され、中央歌壇で認められるようになります。原本は名古屋市蓬左文庫に保管されているようですが、昭和五十八年に復刻版が出ています。今秋の企画展では「名古屋女性歌人展」明治から平成への華麗な足跡」を開催いたします。「八少女」創刊同人の紅一点である花岡和歌子ほか、青木穠子、原田琴子など明治から平成にかけて、名古屋歌壇の発展に寄与した女性歌人をご紹介します。皆さん、楽しみにして下さい。